
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

栃内吉彦先生小伝 抜粋特別号

(ボランティアニュース No. 45～48 号から抜粋)

第1回	ボランティア ニュース No. 45	2017.06	-----	1
第2回	ボランティア ニュース No. 46	2017.09	-----	6
第3回	ボランティア ニュース No. 47	2017.12	-----	10
第4回	ボランティア ニュース No. 48	2018.03	-----	14

特別寄稿

栃内吉彦先生小伝* (第1回)

北海道大学名誉教授 栃内 香次

1 はじめに

しばらく前、北海道大学総合博物館ボランティアの一員である私の妹、宮本昌子を通じて父、栃内吉彦の小伝を掲載してはというお話があった。

これまで本誌に掲載された何編かの小伝を拝見すると、各編の著者はそれぞれの先生と専門分野はもちろん、お仕事の上でも強いつながりがある方々の方である。しかし、我々は、親子の関係であり、身近には違いないが専門や仕事の上でのつながりは全くといってよいほどない。子供の頃、家に訪ねてこられた父の同僚や若手の先生方と交わされていた様々な会話の断片などから、何となく聞きかじった事柄から、こんな日常を送り、仕事をしていたのかなと想像するしかない。

という次第で、この小伝は「伝」というより我々の記憶に残っている父の思い出の「断片」といったものになりそうである。ただ、父は学生時代か

ら、折に触れ様々なところにかなり多くの文章を書いていて、随筆集としてまとめて出版されたものもあり、その多くが手元に残っている。そこで、それらを資料として、我々の記憶に残っている様々な思い出とを組み合わせ構成して行こうと考えている。

そのような次第で著者は一応私としたが、実質は私と宮本昌子の合作と考えていただきたいと思う。

2 生い立ちと学校時代

父、栃内吉彦(写真1)は、1893(明治26)年12月1日生まれである。一般には東京市生まれとなっているが、生地は母親(栃内 繁)の生家のあった栃木県栃木町(現、栃木市)である。

小学校、中学校時代に関する資料はほとんど残っていないが、わずかに残っている記録として、

*タイトル「栃内吉彦先生小伝」は、編集委員会による

** 栃内香次：1939(昭和14)年札幌生まれ。1964(昭和39)年3月北海道大学大学院工学研究科修士課程修了。北海道大学工学部講師、助教授を経て1987(昭和62)年同教授。2002(平成14)年4月北海学園大学大学院経営学研究科教授(後、経営学部設置に伴い経営学部教授)。2010(平成22)年3月同大学定年退職、現在に至る。父の血を受け継いだのか様々のことに興味を持つが、いずれも広く浅くであり、一心不乱に打ち込んだ趣味はない。また、父と同じ趣味は音楽鑑賞くらいである。

小学校時代からの友人で後に銀座審美堂の社長、会長をされた山岡猪之助さんの追悼録に寄せた追悼文の中で、本郷の曙町（現、文京区本駒込）に住んでいて誠之尋常小学校（現在も文京区立として存続している）に通学し、小学4年のときに麻布の永坂（現、港区麻布永坂町）に転居して三河台尋常小学校に転校し、その後高等小学校2年を経て中学に入学したと述べている。小学校が6年まで一貫した義務教育になる以前の古い話である。

中学は東京府立一中（現、都立日比谷高校）であるが、この時期についての記録は、わずかに同窓会名簿や後年開かれたクラス会の写真くらいしか残っていない。この頃から生物には興味があったと聞いたことがあり、植物学を志した原点はこの時代にあるのかもしれない。中学を卒業した父は、1912（大正元）年9月、東北帝国大学農科大学予科（現在の北大）に入学した。予科入学の直後、有島武郎先生との出会いがあり、美術に興味があった父は先生の薦めによって黒百合会に入った。このことは1931（昭和6）年発行の『黒百合会回顧録』（北海道帝国大学文武会美術部）に寄稿したかなり長文のエッセイに書かれている（写真2）。今回しばらくぶりに読み返してみ、今から100年以上の昔、本州各地からはるばる札幌に来て北大に入学した学生達の心境を偲ぶことができた。

父はあまり沢山の画は描かなかったようであるが、北アルプスの燕岳を描いた一枚は気に入っていたらしくずっと書斎に飾っており（写真3）、前記『黒百合会回顧録』巻頭にある会員作品の写真ページにも載っている。

さて、父が学生であった時期は北大が東北大から分離して2つの大学が創設されるという大きな変化の時代であった。北海道大学と東北大学の設立にはいろいろ複雑な関連があり、農科大学と理科大学からなる東北帝国大学の設置に関する勅令が1907（明治40）年6月に公布された後、同年9月に札幌農学校が東北帝国大学農科大学に昇格したが、理科大学は未設置であった。したがって名称は東北帝国大学であるが、分科大学（学部）は札幌の農科大学だけであり、仙台に理科大学が設



写真1 栃内吉彦（59歳、農学部長就任のとき）1952年3月研究室にて

置されたのは1911（明治44）年1月であった。

このようないきさつで、東北帝国大学設立の当初は札幌農学校長から農科大学長に任ぜられた佐藤昌介先生が総長代行を務められたとのことである。それで、父が入学したのは東北帝国大学農科大学であるが、実質的には北大に入学したといえるであろう。北大が分離独立して北海道帝国大学が設立されたのは1918（大正7）年4月である。

したがって、父が卒業したのは北海道帝国大学設立直後の6月ということになり、よく「俺は東北帝大時代の終わりの頃に入学して北海道帝大の最初の卒業生になった」と聞かされたのを思い出す。以上に述べた北大設立当時についての状況については多くの資料があり、よく知られているが、父の学生時代とはほぼ重なっているのも、冗長かもしれないが、触れてみた。

北大を目指したのは宮部金吾先生に師事することを強く薦めた父親（栃内曾次郎）の影響が大きかったようで、後年になっても折に触れてそのことを口にし、またいくつかのエッセイにも書き残している。栃内曾次郎と北大（当時の札幌農学校）および札幌とのつながりは明治初期のわが家の歴史における重要なできごとであるが、現在から百数十年をさかのぼる遠い過去の話で、その詳細はもはや不明であるが、明治初年、少年時代の曾次郎が兄、元吉のところに身を寄せて札幌農学校予科に通っていたおり、当時札幌農学校在学中の同

郷（岩手県）の先輩、新渡戸稲造先生を訪ねたとき、寮で同室であった宮部金吾先生にも会い、そのお人柄に強く惹かれたのがきっかけであったようである。

父は1915（大正4）年7月に予科を卒業して引き続き本科に進学し、1918（大正7）年7月に北海道帝国大学農科大学第3部（現、農学部農業生物学科）を卒業した。本科では宮部先生のもとで植物病理学を学んだ。卒業論文の研究テーマは亜麻立ち枯れ病菌（*Fusarium lini*）の研究で、菌を培養し、その性質を系統的に調べるという実験的研究であった。亜麻は帆布、ロープなどに利用された重要な作物で、日本での栽培適地は北海道だけであり、明治初期の開拓使時代から北海道の特産農作物として奨励され、1940年代まで広く栽培されていたが、その後合成繊維の時代となって廃れ、現在ではほとんど見られない。以前は札幌近郊でも広く栽培され、その名残は札幌の麻生、江別の大麻等の地名に残っている。

亜麻立ち枯れ病は日本や米国でしばしば流行し、重大な病害として植物病理学の重要な研究課題だったようで、父の卒業研究のテーマとなったこともうなずける。この研究はその後父の学位論文につながり、在外研究の際も各地の大学でこの分野の研究者と議論したことが後年書いたエッセイで触れられている。

余談ではあるが、上記のような事情で北海道内には亜麻を原料とする繊維産業が発展し、あちこちに工場が作られたようである。昔から札幌にお住まいの方なら、開拓使が開設した工場を起源と



写真2 有島武郎先生送別会（北大黒百合会回顧録1931年より）。中列左から2人目の背の高い人が父（予科2年の秋）

する、札幌駅の北東にあった「帝国繊維」を記憶されていると思う（その跡地はテイセンホールを経て、現在は高層マンションになっている）。

なお、亜麻立ち枯れ病の原因であるフザリウム菌は細菌ではなく、キノコや酵母などの仲間に分類される生物群で、人間にとって有用なものから種々の植物の病害を引き起こす病原体となる厄介な代物まで非常に多くの種類があるが、土壤中で生活し、種々の植物の根に寄生して病害を起こすものが多く、今日でも園芸関係の文献でよく触れられている。父の研究テーマであった亜麻立ち枯れ病はその後日本やアメリカでの研究と、すでに対策が講じられていたヨーロッパでの実践等の成果をもとに、連作を避けて輪作を行う手法が確立して流行は絶えたとのことである。

3 北大の時代 前期（1920年代）

父は北海道帝国大学卒業後農学実科講師となり、翌1919年8月に農学部助手となった（写真4）。その後20歳代後半から30歳代前半にかけて、父は植物病理学の研究者の道を本格的に歩みはじめた。この時期の研究業績を見ると、種々の作物の土壌病害に関する研究が中心で、卒業論文の研究テーマから継続して興味を持っていたようである。これらの研究の集大成として、亜麻立ち枯れ病の病原菌である *Fusarium lini* と、同じく亜麻炭疽病の病原菌である *Colletotrichum lini* の生理学的比較研究の成果をまとめた学位論文に対し、



写真3 「つばくろ岳の思出」1923年作。この年10月の黒百合会第16回展覧会に出品

1925（大正14）年7月に農学博士の学位を授与された。また、すでにこの頃から専門の学術論文とならんで、農業関係の様々な出版物に農作物の病害とその防除に関する解説記事を執筆していて、病害に限らず動植物一般にかかわる様々なことから研究者の立場から分かりやすく伝えていくという、後年まで続く文筆活動を若いうちから続けていたことがわかる。

話は変わるが、父は1926（大正15）年11月に北大山岳部が設立されたとき、初代の部長になり、途中在外研究の2年間は中断したが、1936（昭和11）年3月まで在任した。父が書いた山関係のいろいろな文章、家にある北大山岳部部報その他の資料を見ても、また子供たちに語ってくれたこともないので、初代山岳部長になった経緯はよく分からないが、生物学の研究者は採集、調査などで山に入ることが多く、そのような教官たちが集まって、山好きな学生たちの相談に乗っているうちに山岳部創立に関わっていったようである。

父は以前から山歩きが好きで、休みに帰京した際には本州中部の山々を歩いていたようで、黒百合会のあるところで触れたように、山を描いた作品も何枚かあり、また、楨有恒氏の『山行』やヒマラヤ登山など、山岳関係の書物もかなり集めていて、それも父の山好きの証左かと思う。後年まで続く山草への興味も山歩きに伴って増していったのであろう。山岳部の記録によると、部長在任中は毎年年末の1週間をニセコ新見温泉や十勝吹上温泉での冬山合宿に参加し、好きなお酒も飲まずに学生たちと山やスキーを楽しんだようである。



写真4 1919年9月夏休みを東京の実家で過ごしたおりの吉彦の両親（後列）と妹たち（前列）

ところで、歴代の山岳部長や山岳部OB会である北大山の会会長のお名前を拝見すると、伊藤秀五郎先生、犬飼哲夫先生、渡辺千尚先生など農業生物学科出身の先生方のお名前が眼に止まる。渡辺さん、東晃さんはお住まいが近く、子供の頃母に連れられてよくお訪ねしたことを思い出す。また、山岳部報各巻の山行記録を見ると、農業生物学科におられた方々のお名前が随所に見られ、後年しばしば我が家を訪ねて来られ、専門の話から森羅万象にいたるまで和気あいあいとお酒を酌み交わしながら議論をしていたことが記憶に残っている。

父は山についてもいくつかのエッセイを書いている。その中で私の眼から見て興味深い数編を紹介したい。

かなり初期の著作として、1931（昭和6）年発行の北大山岳部報第3号に寄稿した「第零義的登山」という1編がある。ここでは自分の専門である生物学を例にとって、研究を本務とする者は、山を歩く際にも常に研究者の眼をもって事物を見なければならぬと説いている。おそらくこれは父にとって山に入るときの基本的なスタンスであったと思われる。

もう一つ、ずっと後、1942（昭和17）年に台湾山岳会刊行の「台湾山岳」第12号に寄せた「南の山と北の山—雪の札幌から台湾の山岳を偲びて—」という1編がある。これは、1940（昭和15）年11月に演習林視察のため台湾に出張したおり、最高峰玉山（当時の名称は新高山）に登ったときの記録である。全体で10ページであるが、前半3ページは北海道の冬山の厳しさに触れ、その年1月に起きた山岳部のペテガリ岳登山における雪崩による遭難について、吹雪に阻まれてかなわなかったその2年前の試みも含めて詳しく述べ、遭難した部員たちへの追悼文ともなっている。この後、玉山登山の主部に移るが、初日はその年夏の大雨で登山路が各所で崩壊して迂回を余儀なくされて悪路に苦労したが、その代わり珍しい寄生植物を発見して採集することができ、崩壊もまんざら悪く

なかったと述べていて、生物学研究者の本領を發揮しているなど感じさせる。なお、翌日は好天に恵まれ、山頂からの眺望を楽しんだようである。

この台湾出張と玉山登山は強い印象を残したようで、ずっと後の1972（昭和47）年10月に刊行された札幌同窓会報第8号に寄稿した「六十年」というエッセイでも取り上げている。この中で、父は北大予科に入学して札幌に来た1912（大正元）年から丁度60年になると書き出し、札幌で過ごした年月を振り返っている1編であるが、忘れられない思い出としてかなりの紙数をあてている。

父は1928（昭和3）年2月から1930（昭和5）年3月にかけて、在外研究のため米欧各国に留学した。主たる滞在国はアメリカ、イギリス、ドイツの3カ国である。在外研究の際の研究課題の一つとして、このときも亜麻立ち枯れ病菌に関する課題が含まれていて、この菌の分類学的な位置づけに関して疑問点を感じその点を実験を行いながら各国の研究者と議論しようという問題意識を持っていたようである。

さて、父は2月7日に横浜を出港してアメリカに向かったのであるが、おりから風邪を引いていたのが悪化し、数日後には肺炎を起こして39度から40度の高熱が続く重態となり、約1週間後、ホノルルで下船して入院することになって、思いがけずハワイに滞在することになった。入院後もしばらくは高熱が続いたようであるが、次第に快方に向かい、3月に入ると入院中ではあったが外出できるようになり、その機会を利用してハワイ大学などを訪問したりハワイの農業事情を視察したりしてその後約1ヶ月を過ごした。ホノルルを去って米本土に向かったのは4月下旬のことで、予定より2ヶ月弱遅れてアメリカ大陸に到着したのであった。この事件は後々まで記憶に残る出来事だったようで、我々子供達が物心ついた戦後になってからもときどきそのことを話してくれた。

しかし、その後のスケジュールにはそれほど大きな支障はなかったようで、今日から見ればゆっくりと時間が流れていた当時の旅の様子が偲ばれる。なお、その後は2年間の外国滞在中、幸い大きな病にかかることもなかったようである。

アメリカ滞在の拠点はウィスコンシン大学であったが、ニューヨークで開かれた学会に出席したり、東部から南東部にわたる各地の大学や研究機関を訪れており、アメリカの東部各地を広く旅行していたようである。残された写真のアルバムを見ると、そのような旅行の一つとして、知人の研究者と一緒に自動車でニューオーリンズまで往復する長途の旅があったようで、そのときは運転免許を取っていたらしい。このことは私がまだ小学生の頃1、2度話してくれただけであり、詳しいことはわからない。

なお、この時期の北大は工学部に引き続き理学部が創設された頃であり、創設時の教授就任が予定されている多数の先生方が在外研究で各国に滞在されていた。父の写真アルバムには、イリノイ大学に留学中であった理学部創設の際の初代の教授のお一人である太秦康光先生ご夫妻が訪ねてこられたときの写真が幾葉か残されている。

翌年5月にアメリカを去り、イギリスに滞在した後、夏頃からドイツに移ってベルリンに滞在して在外研究の仕上げの研究を行った。この時期はドイツ人の若手の研究者が助手役で手伝ってくれ楽しい研究生活を送ったようで、後年書いた「研究の思い出」というエッセイでこの頃のことを懐かしんでいる。ベルリンを出立したのは1930（昭和5）年1月で、数カ国を旅行した後、3月にナポリを出帆し、地中海、インド洋、コロンボ、シンガポール、香港、上海を経由して、神戸に到着したのは4月末であった。（続く）

（ボランティアニュース 45号 2017年6月）

栃内吉彦先生小伝* (第2回)

北海道大学名誉教授 栃内 香次

4 北大の時代 中期(1930年代~1940年代前半)

在外研究を終え、父は1930(昭和5)年5月に農学部教授に任ぜられ、農業生物学科植物学第一講座を担任した。その後は講座担任教授として研究室のスタッフとともに多様な研究を行っている。この頃からの十数年が最も活発に研究が行われた時期で、論文目録を見ると、研究対象は植物の病害全般に及んでいる。専門外の私にはその詳細を語る術はないが、父の書いた文章から推察すると、病害にかかった作物から採取した菌を培養し、種々の条件のもとで病原体が示す性質を調べて系統的に分類し、体系化して行くことが基本であった。そして、病害の発生した作物の栽培条件など、様々な要因と関連づけ、抵抗性の強い品種を作り出すことに役立てることが目標であったと思われる。

なお、この間も卒業研究以来関心のあった亜麻立ち枯れ病の研究はずっと続けられ、1930年代中頃に一応の決着を見たようである。ただし、多事多端な戦時中には取りまとめることができず、論文として発表されたのは1950年であった。

このように、父の研究には菌の培養という作業がつきまとっていたようで、後年書いた研究生活を振り返った文章の中で、「私はずっと培養と縁が切れなかった」と述べ、それらの実験に使われた機器について詳しく触れている。それを読むと、この時代の実験機器は今日の眼から見ると原始的なもので、当時の実験科学者は皆そのような貧弱な実験環境のもとで工夫をしながら研究を進めていたことが偲ばれる。さらに、培養に必要な有機薬品類も、場合によっては自分たちで作っていたようである。そのためか、父は、機械、器具の操作や修理に明るく、子供達から見れば何でも作ってくれるありがたい存在であった。

これらの研究成果は、太平洋戦争開戦直後の1942(昭和17)年頃までは各種学会誌等に多数発

表されている。しかし、その後は戦局の悪化に伴って激減し、戦争がいかに我が国の学術研究の活力を低下させたかを示している。その後、戦後の混乱がようやく一段落した1949(昭和24)年頃から昔日の勢いを取り戻し、研究発表は再び以前のように活発になっている。1930年代から1950年代前半にわたるこの時期の研究活動については定年後に書かれた次の二つのエッセイにかなり具体的に述べられていて、上記はそれによっている。

「研究の思い出」植物防疫 Vol. 10, No. 7(1956)

「プロからアマへ」農業研究 Vol. 14, No. 3(1968)

教授として在任中に発表された論文は多岐にわたるが、共著者には故宇井格生先生をはじめ、よく家に来られた懐かしいお名前が数多く見られる。しかし、これらの研究について、直接触れている解説的な文章はほとんど書かれていない。論文そのものを読み込んで研究内容を把握して紹介するのは私の手に余るので、これら専門分野の研究論文、あるいは解説論文等が発表された主な学術雑誌あるいは専門誌を以下に列記することでお許しいただきたい：日本植物病理学会報・札幌博物学会報・札幌農林学会報・北大農学部紀要・北大農学部邦文紀要・病虫害雑誌。

なお、これらに掲載された論文の一覧は、父と同年に還暦を迎えられた福士貞吉先生との合同の形で1955年に編纂された「栃内・福士両教授還暦記念論文集」に掲載されている「栃内吉彦教授学術論文及著書目録」に詳しい。

また、この時期には主著「植物病理学通論」を誠文堂新光社から出版している。初版の発行は1938(昭和13)年で、1942年に改訂増補版、1944年に改訂3版が発行されている。改訂版は戦時中の発行で、版を追うごとに紙質、装釘が粗末になり、日本の国力が急速に低下して行く様子を如実に示しているように見える。

*タイトル「栃内吉彦先生小伝」は、編集委員会による

なお、本書は戦後1952（昭和27）年に新版が発行された。このときにはかな遣いが改められ、版型もA5判縦書きからB5判横書きに変わっている。紙質もかなり良くなり、我が国の戦後の復興状況を示している。

さて、1930年代の大きな任務として、農学部附属植物園長の兼務がある。父は1936（昭和11）年4月から1947（昭和22）年3月まで植物園長をしていた。北大の植物園の歴史は古く、札幌農学校時代の1886（明治19）年に我が国最初の近代的植物園として開設された。初代の園長は父の恩師である宮部金吾先生、二代目園長は父の大先輩で後に北大総長、学長を務められた伊藤誠哉先生であり、父は三代目になる（写真1）。

園長として父が最も力を注いだのは高山植物園（ロックガーデン）の創設で、数年間この仕事に没頭したことをいくつかのエッセイで述べている。既述のように、山登りは父の趣味の一つであり、それに伴って高山の植物相への関心も深かったようで、高山植物園の創設もこれとつながるのであろう（写真2）。

父の植物園長在任は戦前から戦時中を経て戦後にまたがり、我が国が様々の苦境にあえいだ時期で、温室の暖房もままならぬなど、植物園の管理も困難を極めたようであるが、すべての人々が同じように苦労を重ねた年月であり、それが当たり前であったためか、それらについて書いた文章は少ない。これはちょうど我々子供達が小学校に入学した前後の時代にあたるわけであるが、70年以上昔のことで、我々自身の記憶も定かでない。



写真1 農業生物学科新入生歓迎会
（植物園にて、1941年5月24日）
左から伊藤誠哉先生、宮部金吾先生、父



写真2 高山植物園（ロックガーデン）の地鎮祭にて
（1936年8月21日）左から4人目が父

5 北大の時代 戦後（1940年代後半～1950年代前半）

戦後、父の活動は年齢とともに管理職としての仕事が増えていった。その中でも重要かつ多忙な職務は、北海道大学農学部長と北海道農業試験場長の兼務である。

農業試験場は農業に関する試験研究機関で、農学部との関連が深い。戦前は農事試験場と呼ばれ、国立の組織と府県立の組織があった。国立の農事試験場は各地に支場を有していたので、地域によっては国立、府県立の試験場が並立していたことになる。戦後国立と都道府県立それぞれの組織の役割分担が定められて再編成が行われた。

しかし、北海道では以前から国立と道立の農事試験場（以下、農試と略記する）が一体化されたシームレスな組織になっていたようで、組織として国立、道立に分離再編された後も両者が密接な関係をもって業務が遂行されるような配慮がなされ、場長も当面は一人が兼任することにして急激な変化を避けるようにされた。この新しい制度の発足は1950（昭和25）年で、4月に国立の北海道農試が設置され、11月に道立農試が設置された。このとき農試の場長は父の数年先輩になる島善鄰先生であるが、その秋に北大学長に就任されて場長を退任され、その後を父が引き継ぐことになったようである。

父は1950（昭和25）年12月から国立農試、翌年1月から道立農試の二つの農試の場長を兼務することになり、北大の定年を迎えた1957（昭和32）年3月までその職にあった。

以上、農業試験場の沿革について少し細かく書きすぎたきらいはあるが、上記のように農試の再編成が行われ、新しい体制が発足した時期に場長に補され、新体制の確立にお役にたったのではないかと思ひ、経緯を記してみた。

さらに、父は1952（昭和27）年4月から農学部長に併任されて三つの組織の長を兼務した。おそらく生涯で最も多忙な時期を迎え、研究室の行事に参加して楽しむことも難しくなった（写真3）。当時我々子供達は中学、高校に在学中だったが、各地への出張が非常に多くなったことが印象に残っている。また、公的な行事における試験場長としての職務も多くなった（写真4）。

農業試験場には道内各地に支場、農場があり、また、農薬会社や製糖会社などの農業関係企業の施設も多く、それらへの出張、視察も多かった。そのおかげで厚沢部^{あつさぶ}、磯分内^{いそぶんない}、問寒別^{といかんべつ}などの地名になじんだのも印象深い思い出である。

この他、1950年4月から日本植物病理学会会長をしており、学会の用務も多かった。ともかく、この後定年を迎える1957年までの数年間は、管理職としての多忙な毎日を送っていたことは確かである。

このような激務はやはり身体に影響があったようで、今から考えると定年の数年後に体調を崩す一因となつたのではないかと思われる。



写真3 研究室スキー遠足
（1952年2月16日、三角山麓）



写真4 道農試上川支場に昭和天皇をお迎えして
（1954年8月12日）

なお、父が場長であった時期、二つの農試の所在地は琴似駅西方の線路脇であったので、我々家族も琴似に出かける機会が増えた。定年退職後琴似に住むことになったのも結局はこの縁であり、父の農試場長兼務は我々の暮らしにも転機をもたらす結果となった。

今こうして振り返ってみると、1950年代は、大学制度が旧制から新制に変わり、農試などの試験研究機関も新体制に切り替わるなど、さまざまな変革の時代であった。父はたまたまこの頃管理職に補される年齢に回り合わせ、さまざまの役職に就く結果になったのだと思う。

1956（昭和31）年12月に父は満63歳になり、翌年3月に定年を迎えた。これに伴い、農学部長、国立農試、道立農試の場長などの役職も3月末に退任した。ただし、最終的に北海道大学教授を退職したのは1957（昭和32）年5月31日である。北大の定年退職は、63歳を迎えた年度の年度末（3月31日）であり、2ヶ月ずれた理由は不明である。そして、同年6月19日付で北海道大学名誉教授の称号を授与され、ほぼ39年（予科入学からは45年）におよぶ北大人の経歴を終えた。

余談であるが、北大教員の定年制度は父が教授に昇任した少し後、1933（昭和8）年に制定されている。家に残されている資料によると父はこれを審議する委員会の一員であった。察するところ自分の定年のことなど未だ考えることのない若手の教授を中心に構成されたのであろう。

6. 定年後から晩年へ

定年後、父がまず取りかかったのは、前年の秋に引っ越した琴似町山の手（現、西区山の手）の新居の庭作りである。農地から造成したばかりの空地に庭を作ろうということで、本腰を入れて取り組んでいた。この頃描いた庭の設計図が何枚か今も残っている。中でも力を入れたのはバラで、かなり大きな花壇を作り、様々な種類のバラを植えてその後ずいぶん長い間バラ作りを楽しんでいた。

山草全般に対する興味はずっと続いていて、長い間北海道山草会の会員であり、後に会長を務めている。もともと父は山草に限らず草花全般に興味を持っていて、定年で時間ができたのを機会にそれまで手をつけられなかった趣味に時間を注ぐようになったのであろう。そして、他にもバラの会、菊の会、山草会、花と木の会などさまざまな同好の士の集まりに参加し、会長や役員を引き受けていた。変わったところでは果物好きの人たちが集まってちょっと珍しい果物を味わう愛果会という会にも参加しており、母と一緒に毎回のように出席していた。

このように、定年後はいわゆる悠々自適の生活を送り、新居の整備と庭作りをしながら現役時代にたまっていた書物、論文、資料などの整理をして行くつもりだったようであるが、そうはならず、1964（昭和39）年秋、北海道公安委員会の委員に任命され、これまでとは全く違った世界に関係することとなった。そのいきさつは、それまで公安委員会委員長であった島 善鄰先生が同年8月に急逝され、その後任に推されたためである。島先生は1914（大正8）年に農学部を卒業された同郷の先輩であり、お付き合いの長かった先生であり、農学部長、農業試験場長など父が務めたいろいろな役職で父の先任者であった。そのような事情で、公安委員についても島先生の後任を引き受けることになったようである。

このような経緯で、父は同年10月に公安委員に就任し、その後1967（昭和42）年7月から委員長に互選されて、退任した1971（昭和46）年8月まで務めていた。公安委員の仕事は定期的に会合があり、結構多忙であった。一方、これまでと異なる場でのさまざまな人たちのお付き合いも広がってそれなりに楽しく過ごしたようで、この頃同じく公安委員であった北海道相互銀行の道家齊次さんやクレードル興農の丸子 齊さんなどのお名前をしばしば聞いたことを思い出す。そのかわり、悠々自適の生活は夢となり、庭仕事をすることも少なくなっていく。また、農学部の古巣の研究室に顔を出す機会も少なくなり、残っていた資料の整理なども滞ったままになってしまった。

前にも述べたが、父は植物学者の常として野外の活動が多く、山にもよく登っていた。そのような生活を送っていたためかずっと健康に過ごしてきたのであるが、戦中から戦後の混乱期の苦労に加え、北大、農試のいずれもが新しい体制が変わっていった時期にそれぞれの責任者を兼務したことに伴う疲労が累積したためか、60代中頃から体調を損なうことが多くなった。中でも以前から具合が悪かった胃の調子がしだいに悪化し、69歳すこし前、胃潰瘍で1ヶ月半入院した。おそらく、在外研究に出発の際に船中で肺炎にかかって以来の入院だったと思われる。さらに、75歳のときには狭心症で3ヶ月間入院した。幸い、いずれもそれほど重症ではなく、順調に回復したが、本人も体力の衰えを自覚するようになったようである。公安委員会の仕事はその後も続けていたが、1971（昭和46）年8月に退任した。

その後はときどき短いエッセイを書くくらいで、隠居暮らしを楽しんでいた。しかし、83歳の誕生日を迎えた1ヶ月後、風邪を悪化させて急性肺炎になり、1976（昭和51）年1月29日に死去した。

（続く）

（ボランティアニュース 46号 2017年9月）

栃内吉彦先生小伝*（第3回）

北海道大学名誉教授 栃内 香次

7 巖鷲寮、巖鷲協会と父

北海道大学は、札幌農学校1期生の佐藤昌介先生、2期生の新渡戸稲造先生がいずれも岩手県人であったためか、岩手県出身者が多い。そのようないきさつで、1924（大正13）年秋に岩手県出身学生のための寮建設の動きが起こり、佐藤先生を顧問、葛西勝彌先生を委員長として建設委員会が設立された。このとき、父は、父親（栃内曾次郎）が岩手県出身であったためか、幹事長を引き受け、会計を担当された菊池武直夫先生との3人を中心として募金活動を行ったとのことである。寮は1927（昭和2）年11月に開寮し、巖鷲寮と命名された。

寮の初代理事長は葛西勝彌先生で、葛西先生が1934（昭和9）年に北里研究所に転出された後、島善鄰先生が第2代理事長に就任された。そして、1964（昭和39）年に島先生が逝去された後、三浦四郎先生が第3代理事長に就任された。以後、寮は移転改築などの大きな事業を経て現在に至るまで順調に運営されている。

ところで、巖鷲という名称は岩手県のシンボルである岩手山にちなんでいる。岩手を音読みすると「ガンシュ」となるが、岩手山に春先見える残雪の形が翼を広げた鷲の形に似ていることから、音の似ている「巖鷲」という異名が生まれたとのことである。なお、「シュウ」を濁音にして「ガンジュ」と呼ぶならわしとなっている。

そのような由来から、札幌の岩手県人会も巖鷲協会という名称である。巖鷲協会の歴史は古く、1899（明治32）年に設立され、初代会長はやはり佐藤昌介先生であった。しかし、佐藤先生が1939（昭和14）年に逝去された後、ほとんど活動を休止し、再開したのは1952（昭和27）年であった。このとき、第2代会長として島善鄰先生が就任され、島先生が急逝された1964（昭和39）年から父が第3代会長に就任して死去するまで務めていた。



写真1 新渡戸稲造先生来寮記念 1931年5月19日、巖鷲寮前にて（花巻新渡戸記念館所蔵、巖鷲寮創立80周年記念誌より）
新渡戸先生が最後に来られたときのもので、北大初期の岩手県出身者で巖鷲寮、巖鷲協会の創立とも関わりのあった方々が多数そろっている
前列右から：2人目 島善鄰先生、4人目 葛西勝彌先生夫人、以下左に新渡戸先生、佐藤昌介先生、父、中村儀三郎先生

以上、巖鷲寮、巖鷲協会という岩手県に関係することがらを通じて、東京出身であったにもかかわらず、父が終生岩手県人の心を持ち続けたことと、郷土出身の先輩である島先生との長年にわたるお付き合いの深さを改めて感じる事ができた。そのような父の心情を思い、1931（昭和6）年5月に新渡戸稲造先生が最後に来学されたときに巖鷲寮の前で撮影された記念写真（巖鷲寮創立50周年記念誌、同80周年記念誌に掲載）を転載させていただいた（写真1）。

なお、寮建設の歴史については1979（昭和54）年8月に発行された巖鷲協会創立80周年記念誌ならびに1983（昭和58）年2月発行された巖鷲寮創立50周年記念誌に、寮建設に深く関わられた北大医学部1期生であった南浦邦夫先生が「巖鷲寮創設当時の思い出」という随想を寄せられ、また1989（平成元）年8月発行の巖鷲協会創立90周年記念

*タイトル「栃内吉彦先生小伝」は、編集委員会による

誌には当時巖鷲寮理事長であった魚住 悟先生が「郷土学生寮「巖鷲寮」創立と62年の歩み」という文を寄稿されている。本節をまとめるに際し、大変参考になった。

8 父の趣味

父には多数の趣味があり、晩年まで興味を持っていたものも多い。もともといろいろなものごとに広く好奇心を持ち、また凝り性のこともあって、やり出すと止まないところがあったようである。ジャンルも文系、理系からスポーツにいたるまで広範囲にわたっていた。

もともと、これはその当時の北大関係者一般に言えることのようなのである。その理由として、札幌農学校から始まる北大の歴史自体が札幌の発展と重なっており、北大は札幌の文化、スポーツの拠点、発祥地となり、それらさまざまな活動に北大の教授達がかかわっていたということが考えられる。例えば、本ボランティアニュースの第30号～第35号に連載された木原 均先生の小伝を読むと、先生はスキー普及のさきがけのお一人であっただけでなく、野球に打ち込んでおられたことが書かれている。木原先生は農学部生物学科で父と同期生で、終生お付き合いがあり、先生のごことは父からいろいろ聞いていたが、野球については聞いた記憶がなく、今回初めて知ることができた。このように北大の先生方の多くが多様な文化活動を行っておられたのであろう。

そこで、これまでの各章ではほぼ編年的に父の思い出を述べてきたが、以後は年代にかかわらず、私が関心を持ったことを中心に、父の趣味、興味などについて横断的にいくつか触れて行こうと思う。

・釣り

父はいくつかのエッセイの中で釣りの話を書いている。それを読むと、植物の採集、調査などで山に入る機会が多く、そうした採集のための山歩きの副産物として、キャンプ地では山草を採り、溪流の魚（主として岩魚）を釣って塩焼きにして酒を飲むのが何よりの御馳走であるという話が多く、釣りそのものにのめり込むというよりは、山歩きの一環としてのマルチな趣味であつたらしい。



写真2 ソイを釣る。1954年8月5日 網走沖にて

本人自身、自分ののは正統派の釣りではないと書いている。しかし、その割にはかなり凝っていて、釣り道具もいろいろ残されている。

そのような釣りのエッセイの中に、「層雲峡の岩魚」という1篇がある。これはキャンプ地ではなく、戦前既に観光地だった層雲峡温泉で大物の岩魚を釣った話である。これは快心の釣りだったらしく、宿で仲間とともに釣った岩魚を肴に夜遅くまで飲んだ話で終わっている。

戦後は多忙になり、釣りに行くことも減ったが、農業試験場長時代、道内各地に出張した際、時間があるときは近くの川や海で釣りを楽しんだようで、文章は残されていないが、1951(昭和26)年、網走沖でソイを釣ったときの写真がある(写真2)。このソイは家への土産となり、家族でおいしく食べた。

・狩猟

釣りとならんで、父は狩猟にもかなり入れこんでいた。父の狩猟は専ら鳥打ちで、エゾシカなど大型獣の狩猟はしなかった。父の狩猟の先達は農学部生物学科の同僚であった動物学の犬飼哲夫教授と昆虫学の内田登一教授のお二人である。両先生は狩猟に関しては経験豊富で、父はこのお二人から手ほどきを受けて狩猟を始めたようである。私が知っているのは戦後になってからのことであるが、その頃は鴨猟が中心で、植苗に住んでおら

れた高名な鳥獣標本採集家の折居彪二郎氏のもとを訪れ、美々川一帯で鴨猟をするのが主であった。この間のことはずっと後に「植物防疫」第 18 巻 第 10 号 (1964) に寄稿したエッセイ「私と銃猟」に述べられている。なお、折居彪二郎氏については

<https://trc-adeac.trc.co.jp/>

[WJJS02U/0121315100](https://trc-adeac.trc.co.jp/WJJS02U/0121315100)

を参照していただきたい。

狩猟に関するエッセイには、他にも「鴨ぞうに」という 1 篇があり、ここでも鴨猟に触れているが、話題は鴨のお雑煮の話になり、さらにアヒルのお雑煮に、最後は雑煮から離れて戦前中国で食べたペキンダックが実に美味しかったという話で終わっていて、魚釣りと同様、結局は食の話に収束している。

なお、1954 (昭和 29) 年に第 9 回国民体育大会が北海道で開催されたが、多分この趣味との縁でクレ射撃の関係の委員を委嘱されたようである。私は父に連れられて定山溪鉄道沿線一の沢に作られたクレ射撃競技場に行き、競技を見せてもらった記憶がある。

・家庭菜園

畑を耕して種々の作物を作るのは、今では趣味の一つと言えるであろうが、多くの人々にとって戦時中から戦後にかけての一時期は、家庭菜園などという優雅な言葉とは全く無縁な、生きて行くための必須の仕事であった。我が家でもかなり多種類の作物を栽培していたが、本業が植物学である父の場合、家の畑も研究の実践の場の一つのようにもあった。我々子供達の眼からは、研究室で専門の文献を読み、研究室スタッフと議論をしている姿と、家に帰って畑を見回り、農薬を散布したり施肥をしている姿とが一体化していて、区別できなかった。

このように、戦中から戦後にかけての一時期は、釣り、猟、山菜採り、そして畑作りといずれをとっても趣味というよりは「実益」すなわち日々の「食」を得るための手段の一部であった。山菜とならんで父はキノコにも詳しく、食用になるキノコについていろいろ教えてもらった。定年近くなって、何回か野幌原始林にキノコ狩りに行き、札幌市内ではあまり見かけないキノコを知ったこと

が記憶に残っている。

ところで、山野に自生している山菜、キノコには有毒なものがあり、採取の際には十分な知識が必要である。この点、父は植物と菌類が専門であり、食用にできるか否かについての該博な知識を持っていた。それで、山菜採りでもキノコ狩りでも父の指示にしたがって安心して楽しむことができた。そのおかげで当時は私も一般的な山菜やキノコの見分けがつくようになったが、父の没後はやはり自信がもてず、後継ぎにはなれなかった。

「趣味」でなく「実益」だったこの時代の思いが残っていたためか、父は定年後少し時間の余裕ができた後もこれらの趣味を本格的に再開することなく、植物に関する趣味の中心は草花を愛するという、ずっと優雅な分野にシフトしていった。

・音楽

父の音楽趣味は鑑賞に限られており、歌唱、楽器演奏、創作にわたるものではない。音楽への興味がいつ頃始まったのかはわからないが、在外研究で欧米に滞在中、オペラや演奏会に行った話が散見されるので、その頃からであろう。家にある古い SP レコードには 1930 年代初め頃のものが多く、留学から帰国後集め始めたと思われる。

それらのレコードを見ると、いわゆる独逸系の古典ものはそれほど多くない。逆にホルストの「惑星」、スクリャービンの「法悦の詩」、ストラヴィンスキーの「ペトリューシカ」など、当時まだそれほど聴かれていなかったと思われる曲のレコードが残っている。戦後、生活によりやく多少のゆとりができて最初に買ったレコードがラヴェルの「ボレロ」で、「ずっと買いたいと思っていた」という父の言葉が印象に残っている (写真 3)。

これも余談であるが、海外留学を経て農学部教授に任じられた時期、北大には学生オーケストラが二つあった。一つは 1923 (大正 12) 年に設立された札幌シンフォニー、もう一つはその翌年に設立された北大文武会管弦楽団である。多分教授になった頃だと思われるが、父は札幌シンフォニーの部長をしていた。私の大学院時代の恩師である故仲丸由正先生が、当時学生で札幌シンフォニーの部員であったことをずっと後になって父から聞かされて驚いたことを思い出す。



写真3 SP盤レコード。上から時計回りに、
 ストラヴィンスキー「ペトリューシカ」、
 ラヴェル「ボレロ」（戦後久しぶりに買った）、
 スクリャービン「法悦の詩」、
 ホルスト「惑星」の第2番（金星）

この他、父は邦楽のレコードもかなり沢山持っていたが、これらの邦楽レコードについて話を聞いたことはなく、また私自身が興味を持たなかったこともあって、レコードの整理もせずそのままになっている。

・和歌、俳句と草花

父に限らず、明治時代に教育を受けて教養を身につけた人たちは皆、和歌や俳句の素養があり、

折にふれ歌を詠んでおり、特別なことではないようである。父もそうで、さまざまな機会に歌を作っていて、在外研究で留学中に撮った写真のアルバムにも随所に感想を歌に詠んで書き込んでいる。

和歌、俳句、漢籍に関する書物にも昔から親んでいたようである。明治40年代に出版された、大鏡、増鏡、今鏡などの歴史書から万葉集略解、八代集、俳諧俳文集などを含む国民文庫というシリーズの書物が家にあり、それらを見ると随所にしおりが挟み込まれていて、日頃からこれらを読んで参考にしていたことがわかる。その他にも多数の歌集、句集、詩集があり、その中には普通に出版された書物の他、知人等から寄贈された歌集などがかなりあって、さまざまな分野の歌好きの方々との交流があったことがわかる。

これらの中でも父の興味の中心はやはり植物で、万葉集を始めとして多数の歌集、句集から様々な歌を引用し、その中で触れられている植物、なかでも草花について書いているものが多い。後年、北海道新聞の「魚眼図」に書いた204篇のショートエッセイでもその多くについて古歌や俳句を引用し、昔の人がそれらの植物をどのように見ていたかを述べているものが極めて多い。（続く）

（ボランティアニュース47号 2017年12月）

栃内吉彦先生小伝*（第4回、最終回）

北海道大学名誉教授 栃内 香次

9 文筆家としての父

父は若い頃からさまざまな機会に広範な話題について文章を書いており、北大予科に入学して間もなくの頃から最晩年、80歳近くまで学内の出版物から新聞、雑誌、業界誌など、いろいろなところに文章を寄せている。この他に研究者として専門分野の論文、著書の他にも植物の病虫害に関する解説、あるいは啓蒙的な著述が多数あり、文章を書くこと自体が心から好きだったようである。もちろん、これらのすべてに眼を通すことは不可能で、私が読んだものはその一端にすぎないが、いずれの文章でも植物学者の立場で物事を観察し、その結果をもとにきちんと整理して書いているという印象が強い。当然、題材も植物に関するものが圧倒的に多い。

このように、父の著作は極めて広範な出版物に掲載されており、単行本として出版されたものは少ないが、随筆集をいくつか出版している。現在入手可能なものはないが、書名と概略を以下に挙げておく。

1. 『山談花語』1943（昭和18）年5月

東京、青山出版社 232 ページ

1927（昭和2）年から1942（昭和17）年にかけて雑誌等に発表された39篇を収めている。戦時中の出版で紙質、装釘とも貧弱である。

2. 『若菜頌』（日本叢書19）1945（昭和20）年10月 東京、生活社 31 ページ

日本叢書は戦争末期の1945（昭和20）年4月から刊行され、さまざまな分野にわたっている。第1巻は中谷宇吉郎博士の「霜柱と凍土」という著書である。当時のこととてB5判のざら紙に印刷し、二つ折にしてホチキスで止めて1冊にするという極めて粗末な作りである。

この『若菜頌』は書き下ろしで、例によって野草を食べる話を中心に、古歌から俳句、さらには藤村の詩まで引用して様々な春の野草について書いている。

3. 『春秋夏冬』1947（昭和22）年6月 札幌、柏葉書院 159 ページ

柏葉書院は戦後間もなく設立された（らしい）出版社で、北大関係者を中心に随筆集から科学関係の一般向け解説書まで種々の本を刊行していた。本書はその1冊であるが、出版のいきさつは不明である。本書も書き下ろしで、四季それぞれを題材にした4篇からなる。

この他、『随筆北海道』『あなたの博物誌』など複数の著者の著作をまとめた随筆集に掲載されたものがある。変わったところでは1947（昭和22）年に刊行された『詩文集 層雲峡の四季』という層雲峡温泉の観光振興のような書物に、「釣り」のところで触れた『層雲峡の岩魚』を載せている。

これら以外に、折に触れさまざまな新聞、雑誌に寄稿したものがかなり多数ある。中でも北海道新聞の「魚眼図」に11年間書き続けた小篇は晩年の代表作と言えるので、以下に記載する。

- ・北海道新聞「魚眼図」の小篇 1958（昭和33）年5月11日～1968（昭和43）年9月4日 全204篇
魚眼図は現在まで60年近く続いている極めて長寿のコラムである。父はこのコラムが始まった頃から寄稿していた。1964年ころまでは月3～4篇書いていたが、その後次第に減って月2篇程度になり、1967年後半は月1篇、最後になった1968年には1月から9月にかけて5篇を書いている。各篇は400字詰め原稿用紙1枚程度の小篇であり、かなり念入りに推敲していたようで、短いなりに苦勞があったと思われる。

*タイトル「栃内吉彦先生小伝」は、編集委員会による

その意味で、晩年最も打ち込んだ著述だったと言ってもよいであろう。

なお、このうちの一部は次の単行本として出版されている

- ・『山樹野花』（ぷやら新書 12）1962（昭和 37）年 7 月 札幌、ぷやら新書刊行会 63 ページ
「魚眼図」に掲載された小篇中、1958 年から 1961 年にわたる 78 篇を収めている。この本はいわゆる「豆本」に属し、1960 年から 1973 年にかけて 50 冊刊行された。編者は和田義雄氏である。

余談であるが、和田さんとはこれを縁にお付き合いがあったようで、和田さんが 1973（昭和 48）年に出版された『札幌喫茶界昭和史』という本をいただいている。この本に書かれている歴史は父が札幌で暮らした時代とほぼ重なっており、本小伝を執筆する際にいろいろと参考になった。例えば同書の冒頭に、1920（大正 9）年に開店したカフェ・パウリスターのことが載っており、社長が松村松年先生、筆頭株主が佐藤昌介先生であったことが紹介されている。これらの随筆集のうちの 2 冊が表題に「山」と「花」を含んでいて、やはりこの 2 つが父の興味の中心であったことを物語っている。

・随筆目録

1980（昭和 55）年のいつ頃だったか、農学部農業生物学科を 1929（昭和 4）年に卒業された卒業生で、父とは古くから親しかった岩垂 悟さんが訪ねて来られた。岩垂さんは、戦前は北海道農事試験場を経て旧満州国の農事試験場に勤務され、戦後は 1950（昭和 25）年に設立された北興化学（農薬製造会社、のち北興化学工業と社名を改め現在に至る）に勤務されていた方である。同社は北海道に拠点工場を持つなど、北海道と縁が深く、北大農学部出身者も多い。そのようなつながりで父とは昔からお付き合いがあり、家にもしばしば来られていた。岩垂さんは同社を定年退職された後、ガリ版（孔版）印刷を趣味とされ、いろいろな印刷物を作っておられたが、その一環として父の随筆集を印刷し、

関係者に配りたいということを伝えられた。

上記のように、父の著作は長い年月にわたって様々の出版物に掲載されている。しかも、新聞や雑誌に掲載されたものが多い。これらは新聞からの切り抜き、雑誌の別刷りあるいは掲載誌そのものなど、特別に整理されないまま家に保管してあった。父自身にはこれらを整理する気持ちがあったのかも知れないが、結局は果たさずに亡くなり、保管を引き継いだ私も現役の頃で時間の余裕がなく、丁度良い機会と思い、お願いした。

岩垂さんは、これらをすべて整理し、序文、約 10 篇の随筆、魚眼図の小篇数十篇を組み合わせ、さらに目録を作成して、A5 判 100 ページほどの冊子としてガリ版印刷をしてくださった。表題は『栃内吉彦先生の随筆』で、制作されたのは 1980（昭和 55）年 5 月である。岩垂さんはこれを 3 年間続けられ、続篇、続続篇として 3 冊制作された。なお、最後に作られた続続篇は少し短かめで、目録も割愛されている。

この随筆目録は予科在学時代の 1913（大正 2）年から、1972（昭和 47）年に札幌同窓会報に寄稿した「六十年」というエッセイに至るほぼすべての著述を発行年次順に整理した労作である。

岩垂さんによるこれら一連のお仕事を通じて、埋もれていた父の著作をかなり多数見つけ出すことができ、本小伝の執筆に際し最大の参考資料となった。ここに泉下の岩垂さんに感謝の意を表したい。

10 父と家族

私は 1939（昭和 14）年生まれ、妹は 2 歳下である。我々には年の離れた兄 晃吉がいたが、1942（昭和 17）年 9 月に北大農学部農学実科を卒業して直ちに陸軍に入隊し、幹部候補生を経て 1944（昭和 19）年秋に陸軍少尉に任じられて沖縄に赴き、1945（昭和 20）年 5 月、那覇北方で戦死した。このことは父と母にとって痛恨の出来事であったに違いないが、自分たちの心の内に封じて我々には事実のみ淡々と触れただけであり、それ以上は語らなかつた。兄が出征したのは私も妹も物心つく以前のことであり、我々には兄についての記憶は全くない。

父は、いずれは沖縄を訪れ、兄の戦跡を尋ねたいとの思いがあったようで、それを詠んだ歌を残しているが、結局その思いはかなわなかった。そのような次第で、父や母の意を体して、兄については触れないでおきたい。

家族というと一家そろった写真がつきものであるが、現在のように何かというと写真を撮るという時代ではなかったこともあって、一家四人がそろった写真はほとんどない。野幌にキノコ狩りに行ったときに撮ったのは数少ない例である（写真1）。

これはそのとき同行された農学部の吉田富徳先生に撮っていただいたもので、私が中学生のときである。なお吉田先生も岩手県出身で、『巖鷲協会創立 90 周年記念誌』に載っている草創期の歴代会長小伝中の父の記事を執筆され、この写真はその記事にも載せられている。

父と母の写真もあまりない。ここに掲載したのは父の古希（1963年）祝賀会の際の写真である（写真2）。

なお、母 栃内茂子は旧姓を大枝といい、1902（明治35）年4月28日生まれで、1989（平成元）年10月3日に87歳で死去した。父は盛岡藩、母は川越藩の家臣の家に生まれ、それぞれの祖父の代にはともに幕臣として明治維新に際会して辛酸を味わった家柄であった。



写真1 野幌にて、1952年9月23日
著者（左から2番目）は中学1年生



写真2 父の古希祝いのおりの両親。
北大クラーク会館にて、
1963年12月11日

11 おわりに

これまで随所で述べてきたように、父は文章を書くのが好きで、若い頃から晩年に至るまで多数の文章を書いているが、自伝的なものはいろいろな文章の中で断片的に触れたものが散見されるのみで、まとまった形のものはない。これだけ沢山の文章を残しながら自分史のようなものを書かなかったことを見ると、父には書く意思がなかったのだと思われる。

このため、始めにお断りしたように、本小伝の多くの部分は我々兄妹の記憶に残る父の「思い出」を取り上げたものにならざるを得なかったのであるが、「小伝」ということを考え、基本的に出典は印刷出版されたものに限り、伝聞はなるべく用いないようにした。

9章でも述べたが、岩垂 悟さんが父の残した多数の文章を整理し、年代順、種類別に詳細な随筆目録を作成してくださった。この随筆目録は本小伝を執筆する際の最大の参照文献であり、これが無ければ執筆に多大の困難があったと思われる。

本小伝の執筆は、北海道大学総合博物館ボランティアの会「ボランティアニュース」編集委員会からのお話がきっかけであった。同編集委員会からはいろいろとご助言、ご意見をいただくことができ、完成度を高めることができた。ここに感謝の意を表したい。また私にとっても、この仕事を通じて長年放置していた父の書き残したものを整理し、日々に記憶が薄れつつある 60 年以上昔の古い出来事を思い出し、リフレッシュする機会を得たことが望外の収穫であった。

なお、最初に述べたように、本文の執筆は私であるが、妹宮本昌子には随時内容をチェックしてもらった。それにより私の思い違いや記憶に残っていなかった事柄が判明した箇所がいろいろあ

り、関係者に眼を通してもらうことの重要さに改めて気づかされた。これら妹からの寄与について感謝する。妹からは、この仕事を通じていままでとは異なる新たな父親像が付け加わってきたという感想が寄せられており、やはり一つの収穫が得られたのではないかと思う。

以上、父の小伝を書き綴ってきたが、両親が比較的高齢になって生まれた我々兄妹が直接見聞きしたのは父の後半生に限られている。また、専門が異なる父の研究については深く紹介することができず、最初にお断りしたように「伝」というよりは「思い出」の部分が多くなったことについてご寛恕を請う次第である。 (完)

(ボランティアニュース 48 号 2018 年 3 月)

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース 枡内吉彦先生小伝 抜粋特別号

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、大山、沼田、久末、山岸）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2018 年 5 月
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>